



# 魔女の喫茶店



さぬきほっち

冷たい雨の降るほとんど夜のような夕方のことだった。高校生のせい子は、真っ赤になった手で傘を握り締めながら、黙々と歩いていた。疲れていた。このごろ心のなかにも、よくわからない何かが貯まってきていて、ひとり言が多くなった。

「なんだかなあ」

そうつぶやいて、またそんな自分にため息をつく。

ふと、曲がり角のところに、ぼんやりと明かりが見えた。ああ、あれは・・・暗くてよく分からなかったがあれは、「魔女の喫茶店」だ。本当は別の名前だったのに、マスターがあやしげな黒ずくめの女の人で、いつのまにかそう呼ばれるようになり、いつのまにか本当にその名前になってしまったそう。ただ、お菓子と飲み物の評判は良いらしい。その代わりなかなか開店していないので、よけいあやしがられていた。

今日は珍しく開いている。ガラス張りの窓から、観葉植物で森と化している店内が、少しぼやけて見える。喫茶店らしくなく、まるでおしゃれにした「子どものひろば」のようだ。さまざまな形、大きさのベンチが、森に溶け込ませておいてある。

大きなスリッパ、お茶に丸とかかれた湯飲み型ベンチ、真中から木が伸びている植木鉢の周りを囲んだベンチ……。せい子は、おなかがすいていることに気が付いた。時間もそんなに遅くない。ちょっと寄ってみよう、と思った。

玄関のほうへ回り、木のドアを押すと、ドアの鈴がやさしく二回鳴った。

「いらっしゃい」



のよ。あなたは珍しいお客様なの。ココアはおすすめの特製メニューなんだけど。それに、あったまるわよ？」

そうってカウンターにもたれて、じっとせい子に微笑みかけた。せい子は少しどぎまぎして、そばの葉っぱをさわった。

「そうね、やっぱりメニューがないと困るわよね。悪いけど、言うから聞いてて。」

マスターは宙を見つめて息を吸い込んだ。

「あの。」

「え？」

「ココア、飲みたいです。」

マスターはもうすぐくしゃみが出そうな顔をして止まっていた。なんだかおかしくて笑ってしまった。

「ココア、ください」

我ながら素敵な笑顔でいえた、とせい子は思った。

「あ、そう」

マスターも笑い出した。ポットからマグカップにお湯を注いでから、ココアを作りにかかった。

「そうだ！」

## 魔女の喫茶店

<http://p.booklog.jp/book/36592>

著者：さぬきほっち

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sanukihottea/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/36592>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/36592>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.